

児童の自己成長を促す小小交流に関する実践的研究

～オンラインによる交流活動の日常化に向けて～

水澤 公彰（学校経営コース）

1 問題と目的

現任校Aは全校児童 62 名の小規模校である。中学校区には、他にB小学校と（140 名以上の中規模校）C小学校（全校児童 650 名以上の大規模校）があり、そのほとんどがD中学校に進学している（児童数は、いずれも令和 2 年度）。現任校における 7 年間の勤務中、3 回卒業生を送り出してきた。その中には、中学校の進学に不安を感じている児童が少なくなかった。児童の不安の大きな要因として「友達ができるか」が最も多かった。また、毎年行っている小中連携事業の中には、目的が明確でない事業があるのではという問題意識をもっていた。さらに、児童一人一人が中学校で活躍するためには、小学校段階でD中学校区の児童とのかかわりを通して、自己成長を促す必要があると考えていた。

そこで、児童の自己成長を促す小小交流の日常化を可能にする実践のあり方を目的とし、オンラインを使った実践を試みた。

2 自己成長を促すとは

田中（2014）は、自己成長力という言葉を使い、「なりたい自分や自分の生き方をイメージして自己成長課題を設定し、その解決に向けて学びと成長を繰り返しながら、自己成長し続けようとする意志」と定義している。本研究では、『自己成長』として、コミュニケーション能力と自尊感情の 2 点に着目した。

コミュニケーション能力は、対人関係において、自分の考えをスムーズに伝えていくための能力と捉え、中学校進学に向けて必要な力と考えている。

また、自尊感情はコミュニケーション能力を発揮する上で重要な力と捉えている。国立教育政策研究所（2015）『生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」』では、人（他の子ども）とのかかわりたいと思う気持ちは、自らの体験によってのみ、獲得されるものであり、人とのかかわりが社会性の基礎を形づくるとある。

筆者も同じ目的意識を思った児童同士が交流することにより、他校の児童とのかかわりが楽しいと感じたり新たな発見があると感じたりするので

はないかとこれまでの経験から実感していた。小学校段階で同一中学校区の児童同士の交流を重ねることで、自己に対して自信がもてたりよりよいコミュニケーションの方法を学んでいったりするのではないかと考え、実践を行った。

3 1 年目研究の概要

1 年目は、主にD中学校区で連携事業の調査、D中学校区の全ての 5・6 年生、中学 1 年生に対して、「中学校生活予期不安尺度」（社会文化的不安・対人的不安に分かれている）を活用した実態調査、不安解消を目的とした授業実践の 3 つを行った。

(1) 授業実践（令和元年度 6 年生）

① A 小学校・B 小学校遠隔授業

D 中学校入学説明会の中で、例年授業体験が行われ、A 小学校は B 小学校と合同で授業に参加している。これまでは同じ教室で授業を受けてはいるものの、両校の児童がかかわる場面はほとんどなかった。そこで、当日の合同授業でのかかわりがスムーズに行われるよう、Web 会議システム Zoom を活用し、「対人的不安」解消を目的とした遠隔授業（特別活動）を合同授業前に行った。ねらいを「両校の児童同士が互いの学級の良さにふれ、よりよい人間関係を形成する」として、互いの学校が頑張っていること（リコーダー四重奏・大縄）を紹介しあい、感想交流・質問などを行った。28 人中 27 人が他校との交流に対して肯定的な評価をしている。授業後の振り返りには、不安が解消されたと判断できる記述があった（表 1）。

表 1 授業後の振り返り

A 小学校

- ・中学校で会う前に交流できて、話しやすくなった
- ・みんなが優しくそうで元気で明るいことが分かった
- ・中学校で会う前に交流できて、話しやすくなった。

B 小学校

- ・とても A 小学校の人たちがフレンドリーな感じだったので、楽しかったです。
- ・すごく楽しかったし、A 小学校の人と交流できてよかったし、不安だったけれど交流できて不安はなくなりました。

② A小学校・B小学校と中学校英語担当 教員を繋ぐ外国語遠隔授業

中学校に対して明るい見通しをもつことや「社会文化的不安」の解消を目的とした小学校2校と中学校をつなぐ外国語授業を実践した。ねらいを「D中学校の英語担当教員に入りたい部活について簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる」「他の学校のスピーチを聞いて、どの部活に入りたいかをとらえる」の2つとした。

中学校英語担当教員に対して、好きなことやできること、入りたい部活を英語でスピーチし、中学校英語担当教員からメッセージをもらう授業展開とした。相手校の児童がどの部活に入りたいと考えているかをよく聞く姿、相手に伝わるように話そうとする姿が見られた。授業後の調査から、社会文化的不安の解消と判断できる結果が見られた。(表2)

表2 授業後の振り返り

・中学校の英語担当教員・A小学校・B小学校とを繋いだ外国語の授業は楽しかったですか。	29/29
・中学校の英語担当教員に入りたい部活を上手に英語で伝えたり、6年生の入りたい部活を正しく聞き取ったりすることはできましたか。	27/29
・今日の授業を通して、中学校に進学することが楽しみになりましたか。	28/29

(2) 成果と課題

「中学校生活予期不安尺度」をもとにした調査では、「社会文化的不安」「対人的不安」について調査し、D中学校区の児童の不安な要素がどこにあるのかが数値として明らかになった。「社会文化的不安」「対人的不安」の解消を目的とした授業を実践した直後は、中学校進学に対する不安の軽減と見られる記述が見られた。しかし、研究を進めていく中で、不安を軽減することが最終的な目的ではなく、中学校進学に向けて肯定的な見通しをもって卒業し、よりよい中学校生活を送ってもらうことが目的だと認識を新たにした。

4 2年次の課題研究の概要

(1) 1年目の研究を受けて

1年目の研究から、中学校進学に向けて肯定的な見通しをもち、よりよい中学校生活を送るためには、不安を軽減させるだけでなく、児童自身の力を高めていく必要があることに気付いた。特に、小規模校である現任校の児童は、自分に自信がもてなかったり、コミュニケーションの取り方が分からなかったりすることにより、不安を抱えている児童がいる。一年次の実態調査では、『親しい友

人ができるかどうか不安だ』『ちがう学校の出身の生徒と仲良くできるか不安だ』という項目は、他の2つの小学校に比べ高い数値を示していた。

また、イベント的な交流だけでは児童の力を高めるには限界があり、日常的に交流できるような環境を整えることが大切だと考えた。

中学校進学に向けて肯定的な見通しをもち、よりよい中学校生活を送るためには、1年目の研究で活用したWeb会議システムが効果的であると考えた。Web会議システムを活用することで、距離的・時間的な制約にとらわれることなく、何度も交流することが可能になる。そうすることで、新たな人間関係が構築され、かかわりの中で自信がもてたりよりよいコミュニケーションの方法を学んでいったりする姿を期待した。

三条市の本成寺中学校区では、1年生からの小小交流活動を行い、交流回数を増やしている。現任校では1年生から交流できないが、自中学校区でWeb会議システムを活用することで交流の頻度を上げることは可能である。日常的に交流できるようにすることで、中学校への不安の軽減やコミュニケーション能力を高めていきたいと考えた。

1年目の調査により、互いにかかわりたいという現任校A小学校とB小学校を研究の対象とした。両校児童のかかわりを通して、自己成長を促していきたいと考えた。

(2) 授業実践(令和2年度 4年生)

A小学校とB小学校は、4～6年生の3年間にわたり学校間交流を年に1度行っている。4年生では11月に行われる新潟市への校外学習で、A小学校とB小学校が直接交流することになる。その直接交流をする前に、3回遠隔交流(昼休みに実施)を行った。遠隔交流・直接交流後の振り返り、自己成長実感アンケートの変容(コミュニケーション能力、自尊感情)から研究成果の検証を行った。実践の流れは表3の通りである。

表3 実践の流れ

月	実践の流れ
6月	国語単元「お礼のてがみを書こう」の実践 B小学校へ依頼状→B小学校からの返事
7月	自己成長実感アンケート① 遠隔交流①～8人同士の昼休み交流～
10月	遠隔交流②～8人同士の昼休み交流～
11月	遠隔交流③～8人同士の昼休み交流～ 自己成長実感アンケート② 直接交流～新潟市へ校外学習～ 自己成長実感アンケート③

(3) 遠隔交流（昼休み交流）の実際

両校4年生教室で教室の児童用 PC を活用して交流を行った。Web 会議システム Zoom を活用し、双方向のやりとりを可能にした。HDMI ケーブルで大型テレビにつなぎ、大画面で見られるようにした（図1）。



図1 昼休み交流の様子

今年度は、A小学校児童が8名、B小学校が児童23名だったため、同数程度での交流とし、交流回数を3回に分けた。

交流当日は、互いに自己紹介し合い、共通点を見付ける活動を組織した。スピーチの型を示し、やりとりができるようにした。（例「僕はサッカーと野球なら野球が好きですが、A小学校のみなさんの中で野球が好きな人はいますか？」）最初は緊張が見られたが、時間が経つにつれて笑顔でやりとりする姿が見られた。また、3回目の遠隔交流には、1・2回目の交流の課題を克服しようとする姿が多く見られた。授業後の振り返りから、自尊感情の高まりが確認できる記述が多く見られた（表4）。

表4 昼休み交流後の振り返り

A児：初対面の人との話し方を学んだ。
B児：交流していくうちに会うのが楽しみになってきました。
C児：相手へ自分の気持ちをあまり話すことはできなかったけれど、3回目の交流で自分の思い通り話すことができました。
D児：友達になりたいという気持ちになりました。

(4) 直接交流の実際

新潟市への校外学習で設定した交流活動は次の通りである。

- ① 見学のしおりに相手校の児童のサインをもらう活動を組織する。
- ② サインをもらう際には、「じゃんけんしよう」という言葉をかかわるきっかけとする。
- ③ 自分が好きなものを伝え、相手に聞きたい質問をした後、サインをもらう。

手紙を書く前の振り返り（表5）と直接交流後の振り返り（表6）を比較すると、自己成長が確認できる記述が多く見られた。

表5 手紙を書く前の授業後の振り返り

A児・・・自分の紹介、好きな〇〇を書いても合わなかったら嫌だから、手紙を書くのはそこまでうれしいわけではありません。仲良くするためには、どうすればいいか、あまりわからないので、不安です。
B児・・・B小学校の6年生は知っているけれど、4年生は見たこともないから、手紙を書くのも一緒に新潟市見学をするのもどちらも不安です。
C児・・・私は、B小学校の人と初めて会うので、手紙を書くのは少し不安です。また、会うことを想像したとき、少し平気という気持ちと大丈夫かなという気持ちがあります。

表6 直接交流後の振り返り

A児・・・「じゃんけんしよう」と言っていると、どんどん緊張がほぐれてきてとても楽しくなり、18人と交流することができました。最初はB小学校の人から「じゃんけんしよう」と言われるのを待っていることが多かったけれど、B小学校の人が話を聞いてくれる人だと自信がつき、自分から話しかけられるようになりました。自分から話しかける大切さを知りました。
B児・・・B小学校24人（先生も含む）と交流できたのでよかったです。休んだ人の一人とも会えるなら会ってみたいです。
C児・・・私たちA小学校の人が緊張する中で、何とか絆を深められたのも、お互い仲よくしたいという気持ちと優しく話そうとする気持ちがあったからだと思います。それだけ、優しさ、絆って大切なんだと改めて感じました。自然教室で会えるのが楽しみです。

(5) 自己成長実感アンケートの変容

事前調査は、7月と11月に各学校で実施した。分析結果は、js-STAR プログラムにより分散分析をした。

コミュニケーションスキルの8項目中3項目（『自分の伝えたいことを相手に上手に伝えられる』『学校で相手にあいさつしたり、声をかけたりするようにしている』『友達の気持ちを考えながら話をしている』）で有意な差が見られた。また、自尊感情11項目中2項目（『私はいろいろな人と協力して活動できる』『私は自分に自信がない』）で有意な差、3項目で有意傾向（『学校で苦手な（得意でない）ことも、進んでやってみようとする』『学校で勉強していて、できなかったことができるようになるとうれしいと思う』『学校にいるとき、私はいろいろな人と話をしたり遊んだりするのが好きだ』）が見られた。さらに、自尊感情11項目全体でも有意な差が見られた。

5 本研究の成果

児童の自己成長を促す小小交流のために必要なことは、① 交流の日常化、② 環境整備、③ 複数年の継続である。上記3点を加味した遠隔交流と直接交流により、子どものコミュニケーション能力や自尊感情が高まるのである。

(1) 交流の日常化

年に1回のイベント的な交流だけでは、コミュニケーション能力の育成、自尊感情の向上に対する成果は出にくい。中学校区の児童同士、職員同士が日常的に交流することが重要である。

Web 会議システムを活用することで、交流の頻度を上げることが可能となる。今年度は、4年生で3回、6年生で1回、それ以外に職員同士の打ち合わせで数回 Web 会議システムを活用した。現任校A小学校の4年生は、3回の交流を通して、大きく気持ちが変わっていることが交流の様子や振り返りから読み取れる。交流に対して消極的になっていた児童が、直接交流の際、自分から積極的にかかわろうとするようになった。また、1回目の昼休み交流で声が小さいという課題があった児童は、その後の交流で声を大きくしようとしていた。1回目の交流の反省を生かして、自分の課題を克服しようとする姿だと捉えている。このように、1回の交流では期待できない児童の変容が、日常的なかかわりによって生まれてくる。

さらに、教師同士の日常的なかかわりも可能となる。本実践では、B小学校の担任と何度も Zoom を使った打ち合わせを行った。顔を合わせて打ち合わせしたことにより、お互いの考えが伝わりやすくなるだけでなく、交流当日のカメラの位置や児童の席などを細かく相談することができた。交流の目的や手立てを共有する意味においても、教師同士の日常的なかかわりを行うことは、本実践において重要な手立ての一つとなった。

(2) 環境整備

遠隔交流を行うためには、日常的に交流できる環境整備、交流を始めるための環境整備が重要である。本研究では、遠隔交流を行うに当たって、関係機関の協力のもと交流できる環境を整えてきた。GIGA スクール構想の実現に向けて、遠隔交流に必要な情報機器も整ってきた。また、コロナウイルス感染症拡大による一斉休校に伴って、長岡市の学級担任が Zoom による児童生徒とのかかわりを経験した。教育センターや各学校の研修により、Zoom を使った遠隔交流への抵抗感が少なくなった。これらにより、2年間で多くの遠隔交流を行い、成果を上げることができた。長岡市のすべ

ての学校に同じ情報機器が導入されているので、担任同士の簡単な打ち合わせだけで、市内のどの学校でも同様の実践が可能となる。

(3) 複数年の継続

コミュニケーション能力の育成、自尊感情を向上させるためには、ある程度の年数をかけて計画的に交流を行うことが重要である。これまで続いてきた学校間交流の前段階として、遠隔交流を位置付けることによって、より成果が上がると確信している。年1回の直接交流をより充実させるため、目的を明確にした遠隔交流を事前に繰り返すことで、児童の変容が期待される。お互いが仲良くしたいという気持ちが高まったところで直接交流すると、良いかわりやその後の変容が見られる。

(4) コミュニケーション能力の向上・自尊感情の高まり

上記に述べたように、3年間を通した遠隔交流を行うこと、イベント的な交流活動に終わらずに、日常的な交流の形を作ること、交流するための環境を整えること（かかわるきっかけや教師同士の打ち合わせなども含む）により、現任校A小学校児童とB小学校児童のコミュニケーション能力が向上し、自尊感情が高まったといえる。調査結果の数値のみならず、振り返りの作文や実際の姿からも変容が見られる。交流の内容を工夫することにより、多くの項目で成果が確認できるものと確信している。

6 課題

課題としては、① 学校規模にとらわれない交流のあり方、② 目的の共有、③ 職員・児童の情報リテラシーの向上の3点があげられる。規模の大きいC小学校との交流のあり方、中学校区としての遠隔交流の位置付け、GIGA スクール構想の実現を見据えた情報リテラシーの向上については、本研究において課題が山積している。しかし、『「令和の日本型学校教育の構築を目指して」(中間まとめ)【概要】』(2020)でも述べているように、今後一層 ICT の重要性が高まるであろう。今後も研究を進めていきたい。

【引用参考文献】

国立教育政策研究所 (2015)、『生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」』

文部科学省 (2020)、『「令和の日本型学校教育の構築を目指して」(中間まとめ)【概要】』

田中博之 (2014)、『自己評価を通して 21 世紀型学力を身につける子どもたち』、ベネッセ教育研究開発センター主催フォーラム発表資料